

書評

唐沢かおり著

『なぜ心を読みすぎるのか——みきわめと対人関係の心理学』

(東京大学出版会、2017年)

鈴木 真

本書の印象としては、Adam Smithの*The Theory of Moral Sentiments*⁽¹⁾を社会心理学的にアップデートしたもの—ただし、公平な傍観者は登場しないもの—を読んだ感じがした。本書の記述について理解が難しいと感じた箇所はほとんどない⁽²⁾が、全体としての内容は濃い。

本書の主題は著者の本来の専門である「対人認知」であり、方法論は社会心理学のものである。哲学などに学際的な目配りはあるものの、実証研究に関しては、脳神経科学や生理学の研究が出てこず、発達研究も心の理論のところくらいに少し出るだけ、というくらい社会心理学に特化しており、著者のこだわりを感じる。

本書の主張は色々あるが、大きい主張は、(1)「対人認知は他者を評価する過程だ」(p. 4⁽³⁾)というものと、(2)対人認知は「行動を生み出す原因を探って「他者の心を読む」(p. 15)というもの、そして(3)対人認知は個人的だが他者と自分をつなぎ、社会的・道徳的な秩序の基盤となる (p. 291)、というものだと思う。本書は、このうち(1)と(2)の主張を擁護し、この視点の下でこれからの対人認知の研究を進めようという提案をしたうえで、それを実行する際のプログラムを示す。それで現在可能な程度まで議論を進めると(3)に行きつき、社会心理学の課題であった、心と社会を統合的に見るということを達成できる見通しが立つ、と論じているというように読むことができよう。以下では、まず本書の意義について述べ、次にいくつか論点を提起する。

本書の意義

本書は対人認知のソースブックとして優れているが、その役割を超えた意義も持つ。それを抽象的に言うと、評価を組み込んで、つぶつぶをつなげ、意味付けをしたことだと思う。

本書は、第一に、ばらばらな研究をつなげるということをしている。少なくとも私には、伝統的な対人認知の研究は、印象形成や対人認知次元や帰属の研究などがばらばらにあって、しかもそれ以外の領域との関連もよくわからない状態だった。本書では、旧来の研究が行動の原因の予見・説明と行動した人の評価という視点で統一的にみられること、さらにこの視点から心の推論、心的機能の認知、道徳性、共感や他者の影響に関する研究などにつながるものが指摘されている。こうした対人認知を中心とした学問的連関の全体像(研究プロジェクトの原型)を提出することは、著者のような対人認知の専門家でありかつ他領域にも精通した研究者でなければできないことだと思う。本書が描いた像が大体において適切ならば、本書で言及されていないものも含めて、色々な研究を大きな枠組の中で位置づけ・意義付けることができるようになるだろう。また、ここで関連付けられた研究の多くは学際的なものなので、本書は社会心理学以外の研究者にも自分の専門としていない「対人認知」の関連分野に関心を持つべき理由を示しているとも言えよう。

次に本書は、ばらばらな心を持つ個人が対人認知による相互関係を通じて社会を構成するという枠組を提示し補強している。これが第一の意義で言及した、対人認知を中心とした枠組の内容である。社会心理学は「心と社会に関する統合的な知を目指す」学問のはずなのだが (p. 3)、個人に対する社会的現象の影響の話をすることはあっても、個人がどのように社会を構成するのかという話までいかないことが多いようにみえる(対人認知の分野も、単なる個人の認知を研究する、社会的な重要性を持たない分野とみなされる傾向があったかもしれない)。方法論的個人主義を固守しつつこの難しい課題を達成しているところが見事である。

第三に、本書は対人認知の枠組に評価を入れて、新たな意味付けを行っている。上記二つの意義は、従来の対人認知の「理解—予測—統制」の枠組に、(他者への)評価関心と(他者からの)評価懸念を組み込んだことで得られたものである。また評価の視点を組み込むことで、従来の枠組ではうま

くできなかった、「バイアス」を含む対人認知や対人行動のメカニズムや傾向の意味付け(「適応」の発見)をすることができることを示している。著者は、適応的視点(あるメカニズムや傾向がそもそも何の目的で存在するか、どのような機能を果たすのかを考えることが、そのメカニズムや傾向が持つ細部の特徴を探究するのに役立つ)を活かして、さらなる探究の方向を示しているというように読めるかもしれない(cf. pp. 287-288)。

論点

[1] 対人認知・対人評価が実際より主観的・個人的にみえてしまっていないか

この著作では、対人認知は社会を構成することにつながるという意味で社会的だと(説得力のある仕方)論じられているけれども、一方で対人認知の過程自体の「個人的・独善的」な性格(p. 291)が対照で強調されている。

「他者を知り、人物像を作り上げる過程は、一方では認知する主体である「私」のものとして、個人の中に閉じた過程だ」(loc. cit.)。

対人認知自体は個人の中に閉じた過程なのか、という点については疑問の余地がある。当事者は、自分が行動して相手の反応を待つという実験に似た行為を相互にしつつ、互いを知ろうとしたりもする。相手ないし環境に介入するという意味では、必ずしも個人に閉じた過程とは言えない。他者が話せる場合には、心の状態を聞くこともできる。しかも、人々は互いにわかっただけでなく、言葉・非言語で心の状態のシグナルを送りあう(この側面は触れられている(p. 163)ののだが強調されていない)。また、ゴシップ、ニュース、相談などにおいて、人々はその場にはいない他者の情報や評価を交わし影響しあう(この側面も考慮に入れている(p. 25)ののだが強調されていない)。特に言語においてはその情報や評価を否定したりすることも可能であり、そのため話し合いにおいて理解や評価が論理的に変更を迫られたりすることも考えられる。こうした点にあまり焦点が当たっていないため、対人理解の社会的(でダイナ

ミックな)側面の描写が薄い感じがする。

なお、対人認知にせよ対人評価にせよ、聞き知った一般的な人間像や評価基準によって影響を受けるかもしれない。フィクション(小説、映画、テレビドラマ、演劇等)や様々な学問(心理学を含む)における人間理解は他者理解に影響を及ぼすかもしれないし、宗教や規範的学問における道徳基準とその議論は他者評価に影響を及ぼすかもしれない。たとえば、経済学を学ぶと、人は自分の利益しか考えないとか、それが賢い人がすることだという考えを得て、他者をそういう目で理解・評価してしまいやすくなるかもしれない。もしそうなら、対人認知は特に主観的なものとも、個人に閉じたものとも言えないのではないか⁽⁴⁾。

特に他者の評価に焦点を置くなら、それは上記で触れた(1)当事者・第三者とのコミュニケーションや議論の他にも、(2)世論・評判との整合性、(3)社会的規範・社会的役割⁽⁵⁾、(4)行為の結果を受けた人(受益者・被害者)の反応、(5)他者(行為者)の社会的・経済的地位、(6)自分(評価者)と他者(行為者)と受益者・被害者の関係性、(7)自分自身への評価との一貫性、(8)(当の他者の)行為の結果の評価等にも影響を受けそうにみえる。対人評価はモジュールになっていて影響を受けない、という可能性もあるが、いずれにせよ検討が必要だろう。(1)~(6)は評価の社会的な側面と関係があり、(7)や(8)は評価への理性的な反省の影響と関係があるだろう⁽⁶⁾。それらを含めて他者の認知と評価の全体的な位置づけを、できれば、自己についての認知や評価と比較しつつ、してほしいと思った。

[2] 適応的視点と対人認知の機能のとらえ方

「対人認知」は何のためにあるのか、というのが本書の主題の一つだが(p. 2)、これについての答えの枠組—他者への接近・回避の決定、他者の行動予測、対人評価とその交換のため—が天下り式に与えられているようにみえる⁽⁷⁾。この枠組は色々な発見の意味付けをするのに使われており(たとえば、人柄のよさと有能さが評価的判断の主要な次元であることの機能の説明(pp. 61-65))、重要だと思われるが、その正当化が問題に

なる。「何のため」—どんな機能を果たすために個体の形質が進化的に構築されて残り広まったのか—ということを本当に特定するためには、この正当化がカギとなる。本書には対人認知の形質が上記の機能ゆえに有用であるという議論があるが (passim, 特に第1章)、これは現在の環境で適応している側面があるという話なので、進化論的な意味での適応である (進化の過程で有用であってそれがゆえに生存と繁殖が助けられて対人認知の能力が人類に残り広がった) ということは言えない。これを言うには、少なくともこれらの機能を果たすために対人認知のメカニズムや傾向が選択された環境条件を特定して、そのような環境条件が人類の進化の過程で成立していたということや、メカニズムや傾向に (生物学的ないし文化的な) 遺伝的基盤があることについて、証拠が必要だと思う。また、対人認知のメカニズムや傾向が適応ではなく、むしろ認知機能一般のスパンドレルにすぎないといった可能性を排除する必要があると思われる。だが本書では (他の多くの社会心理学の文献と同様?) このような証拠は提出されていない。「対人認知」は何のためにあるのかを探究することは研究に有用だと思うが、これに答える、進化論的機能・適応を特定する仮説が慎重に検討されなければ、研究をミスリードするかもしれない⁽⁸⁾。

具体的には、たとえば、接近・回避を決定するのが対人認知の一つの進化論的機能だということはあると思うが、これをさらに他者 (相手の人間) への接近・回避へと限定している (pp. 12-13) のには懸念がある。第一に、他者の接近・回避の決定をするシステムが適応度を向上するのは、接近や回避が有益な選択肢としてある場合に限られる。しかし、たとえば対人認知のメカニズムが集団が小規模 (150人以下?⁽⁹⁾) で個体が離脱して生存することが非常に困難だったと思われる狩猟採集期に選択されたとするなら、現在のように付き合う相手を選ぶことができたかどうかは疑わしいかもしれない。人には、相手が選べないなら、(1) 自分の反応・行動の方を変えたり、(2) 相手を批判したり教育したりして変えようとしたり、(3) 第三者や非人的環境に働きかけて相

手の行動が有害にならないようにしようとするといったこともできる。上記のような付き合う人を選びにくい状況では、これらのうちどれかの対応の方がより適応的であった可能性もある。第二に、現在においても、否定的な評価を下すことが直接的に回避的な行動につながっているわけではない。著者も第6章で論じているように、相手に否定的な評価をする場合には懲罰を下す機会を与えられれば多くの人ができるわけだが、ある人に懲罰をするというのはその人に接触を持ちにくいことである。思うに、人間の対人関係に関わる意思決定システムは、誘発性—ひきつけるか、反発させるか、という特性—に影響されるが、相手の人間のものだけでなく、相手の行動とその結果、そして相手に対する自分 (や第三者) の行動とその結果の予想上の誘発性にも影響される。このため、たとえば、加害者には反発しつつも、その相手に罰を与えることにはひきつけられて、安全に罰を行う機会を与えられればそうする、といった行動が生まれてくるのだと考えられる。

[3] 対人認知における評価と道徳

対人認知では「道徳的とも言えるような評価的な判断を下す」(p. 2) と言われているが⁽¹⁰⁾、個人的利益の観点からすると、付き合う他人は自分にあって協力できる人 (自分にとって都合のいい人) であればいいわけで、必ずしも道徳的によい、正しい人である必要はない。むしろ、自分に瑕疵があったり敵がいたりする場合は、そうでない方が好ましかったりする場合もある。道徳的评价というのは、こうした個人的な都合のよさの次元を超えたある意味で第三者的な価値づけをすることだと思うが、本書で論じられた対人認知における評価には、この第三者的観点 (Smithで言うところの、公平な傍観者の視点) が含まれる必要はないだろう。その意味で、対人評価は必ずしも道徳的である必要はない。

ただし著者は、対人認知を通じて人間関係、ひいては社会・道徳秩序が構成されることを説明しようとしており (第7章)、これには道徳的観点がいかにして一部の評価に生じるのか、ということも説明できる必要があるだろう。これは長年道

徳哲学で論じられており、心理学でも発達や進化に関わって主題とされてきた論点だが、本書では検討されていない。

なお、本書によると対人認知が含むのは個人(特に他者)の評価であるが、道徳評価には事態の評価(たとえば、富や福利の分配の評価)や、意思決定における評価(主に、ある行為の時点で個人や組織が何を選択すべきかに関わる評価)、集団・社会・文化・組織の評価や、社会的な規範・役割・制度・政治体制、などの評価もある。道徳という現象に取り組もうとするなら、対人認知がこうした評価にいかに関与するのかということも問題になってくるだろう。

本書で対象としている研究の一部、たとえば、モラル・タイプキャスティング研究は、確かに道徳評価の基盤に関わっているようにみえる。著者によると、「道徳的な行動は、一般に、その行動を行う主体と、その受け手の二者関係で成立している。道徳が、基本的には他者への配慮や加害といった二者間の相互作用に関わる問題であるからだ。」(p. 212)そして、「配慮は、……、その必要に関する判断は、道徳的判断の核心をなすものだ。」(p. 250)こうした道徳の特徴づけと、その枠組で検討される対人認知を通じた評価の研究は、ケア(配慮)と危害への関心が道徳の根本的な基盤であるということを示唆する。フォークな道徳について社会心理学者のJ. ハイトは、ケア/危害基盤以外に、公正/欺瞞基盤、忠誠/背信基盤、権威/転覆基盤、神聖/墮落基盤などがあると指摘しているが(Haidt (2012), Ch. 7)、本書で紹介された研究は、ケア/危害基盤が結局は優勢で基本的であるということを示しているのだろうか。もしそうだとすると、これは現在の、西洋近代の影響を受けた個人主義的な社会にだけ当てはまるのか、それとも時代や地域を横断するより普遍的な傾向なのだろうか。

[4] 非人間化(モノ化と動物化)と、人間性の認知の影響

第5章では非人間化という興味深い現象から、相手の人間性(「本性」と「独自性」)の認知が論じられているが、色々な疑問が残った。

相手の非人間化が起こると、道徳的コミュニティから排除され、道徳的規範と配慮の対象外となり、加害の対象になりやすくなる、と言われていている(pp. 173-178)⁽¹¹⁾。しかし、その後の議論(p. 194)をみると、動物化の議論ではこの危険が強調されてきたが、モノ化—相手に感じて意欲する心を否定すること(§5.3)⁽¹²⁾—ではそれほどではないようだ。また、マインド・サーベイでは神は経験性が低く(p. 221)、本性が低いことになるので(p. 222)、モノに近いことになるが、危害を加えようとする人は出ないように思われる。モノ化ではそれほど加害の対象になりやすくないのか、という疑問が残る。

神とは逆に、マインド・サーベイでは少女と女性に経験性が非常に高いと評価されている(p. 221、図6-3)。図5-4「社会的カテゴリーに対する人間の本性と独自性評定」(p. 207)では、女の子は本性(≒経験性)が高く、独自性(≒行為性)が低いと判定されている。第5章で紹介されている、女性はモノ化されているという見方からすれば、これらの結果は意外である。実際、女性は情緒を期待されて感情労働を振られることも多いので、されやすいのはモノ化ではなく動物化の方かもしれない。

動物化は、たとえば外集団に属する人の独自性を否定する際に起こるとされる(§5.4)。しかし、子どもも本性が高く独自性が低いと判断されがちだが、彼らに対する加害が促進されるというよりも、彼らを保護するようにふるまい、道徳的行動の賞賛に低いハードルを設定することが適切だとみなされると言う(§5.7)。これは、著者自身が気づいているように不思議である(p. 204)。同じく独自性が低いとみなされる子どもと外集団の人々が同じように扱われない—同じく甘い扱いを受けたり同じく攻撃の対象となったりはしないのはなぜだろうか。興味深い問いだが、本書では答えられていない。

[5] 対人認知の社会心理学モデルと方法論

対人認知は様々な変数によって影響を受ける、その処理の結果には—おそらく過程にも—文化差や個人差がある、という話が本書には繰り返し出

てくる。実証研究でも、たとえば経験性と行為性のどちらが配慮の基盤なのか、という点について一致しないようにみえる結果が出ていることが報告されている(第6章、pp. 242-243)⁽¹³⁾。そこで、対人認知に関する社会心理学のモデルがどれくらい頑健なのか少し気になった。その点でも、本書ではなぜか言及がない自閉症スペクトラム関連の研究や、発達、脳神経科学の観点からの対人認知研究も考慮に入れたらよいかもしれない。

また、「目」の絵があると社会的に望ましい仕方である、という研究が紹介されているが(pp. 280-284)、再現できなかったという報告もあり、またこうした効果が本当にあるかどうかについて疑いを投げかけるメタアナリシスもある(Northover et al. 2017a, 2017b⁽¹⁴⁾)。近年、心理学研究の再現性は大きな話題になり、社会心理学の伝統的な研究がその焦点になったが、「目」の実証研究についてはどう考えたらよいだろうか。

注

- (1) The Sixth Edition (1790).
- (2) 例外として、第3章において、状況と内的特性の二分法に基づく伝統的な帰属研究を、そうでない新しい研究と並行してこれまで同様続けていいと著者が考えているかどうかはわからなかった。また「共感」の潜在的な危険性が指摘されているが(pp. 278-279)、これがいかなる意味における「共感」についてのコメントなのかわからなかった。
- (3) 以下、特に断りがない限り、頁数は本書のもの。
- (4) 公平さのために指摘しておく、著者もたとえば脳還元主義的な信念が対人認知に与える影響については検討が求められると指摘している(pp. 223-224)。
- (5) たとえば著者は子どもと大人にお菓子をあげるとしたら、子どもにあげるの、社会的規範のためというより子供への道徳役割づけの傾向のためだという趣旨の発言をしているようにみえるが(p. 234)、この傾向自体が社会的規範のために存在している可能性はないのだろうか。別の例で言うと、相手を動物とみなして苛烈な扱いをしてしまうことがあるという指摘がある

が(第6章)、これは動物の道徳的地位に関する社会規範や行為者のそれに関する態度に依存しないのだろうか。「動物の権利」論が広まり、動物に関する社会規範やそれに対する態度が変わっても、外集団の人が動物化され、加害されやすくなるという傾向は変化しないのだろうか。

- (6) たとえばJ. ハイトの社会的直観主義者モデルは理性が道徳的判断に直接的に働くことには否定的だが、他者との話し合いを通じて改訂されることにはより肯定的である(Jonathan Haidt (2012) *The Righteous Mind: Why Good People Are Divided by Politics and Religion*. Pantheon, Part 1, esp. p. 47)。こうした言語的コミュニケーションを通じた他者評価の更新の過程にも検討が及べばよいと思った。
- (7) 関連して気になるのは、本書には対人認知の機能を心を知ることに限定する傾向があることである。「対人認知は、理解すべき対象としての他者について、それを動かす本質である「心」を知るためになされるのだから……」(p. 123)といった記述が出てくる。性別、外見・性的魅力、身体的能力、健康さ、若さ、社会的・経済的地位、属している集団、住んでいる場所、勤め先、交際関係、出してきた成果など、非心的な情報の方に関心がある局面も多そうに見える。
- (8) 著者は時に、あるメカニズムや傾向が「社会全体の福利が上がるという観点からは適応的」(p. 249; cf. p. 257)というような話もするが、群淘汰の可能性を擁護したりするのでなければこの方向で適応を論じるのは難しいだろう。
- (9) Dunbar, R. I. M. (1992). Neocortex size as a constraint on group size in primates. *Journal of Human Evolution* 22: 469-493.
- (10) 対人認知に含まれる評価については、それが常に(評価的な情動や直観などではなく)判断に至るのか、ということも気になった。
- (11) 本書で取り上げられている非人間化は、モノ化といい動物化といい、人より「下等」だとみなす事例である。しかし相手を超人とか神・天使とかいったより「高等」な存在とみなすという事例もありうるので、こちらの場合にどういう結果が生じるのかが気になった。

- (12) 相手や相手との関係を自分の目標達成への貢献度でみるという「道具的モノ化」にも言及があり、これには課題解決への他者の適性の判別と効率的な利用を促進するという効用もある、という話が出てくる (§ 3.5)。道具的モノ化に本来のモノ化が伴うということについてはテキスト中に論証がなかった。
- (13) 行為性と経験性の認知に関しては、個々の実証研究の記述にもいくつか疑念がある。たとえば、主体がいれば客体がいると非意識的に思うので、行為性が高い(低い)人物とペアに考えられた人は客体(主体)とみなされる傾向が出る、という主張がある。この、主体—行為性を持つ者—と客体—経験性を持つ者—の相補性の論拠となる実証研究では、客体的認知が拷問に耐えられるかどうかという項目ではかられている—耐えられないと答えられるほど客体和みなされていると解釈されている (p. 240)。しかし、主体性・行為性は自己統制力と結びついており (p. 220)、耐えられるかどうかというのは自己統制力と正の相関を持つように思うので、それは客体的の尺度というより主体性の尺度のように思われる。仮にこれが正しいとすると、実証研究の結果は、行為性が高い(低い)人物とペアに考えられた人は行為性が低い(高い)とみなされるという、単なる対照の効果を示しているだけのように解釈できてしまう。
- (14) Stefanie B. Northover, William C. Pedersen, Adam B. Cohen, and Paul W. Andrews (2017a) “Artificial surveillance cues do not increase generosity: two meta-analyses.” *Evolution and Human Behavior* 38: 144–153; Stefanie B. Northover, William C. Pedersen, Adam B. Cohen, and Paul W. Andrews (2017b) “Effect of artificial surveillance cues on reported moral judgment: Experimental failures to replicate and two meta-analyses.” *Evolution and Human Behavior* 38: 561–571.